

反復帝王切開を受けた母親が 手術直後に体験したカンガルーケアの主観的体験

齊藤 佳余子¹⁾, 長谷川 ともみ¹⁾, 永山 くに子²⁾

1) 富山大学大学院医学薬学研究部母性看護学

2) 富山大学男女共同参画推進室長

要　旨

本研究は帝王切開を受けた母親が手術直後に体験したカンガルーケアをどのように受けとめたのかを明らかにすることを目的とした。反復帝王切開直後にカンガルーケアを体験した母親5名を対象とし、質的帰納的分析を行った。分析の結果、手術前は【元気な子どもを得る期待感】、帝王切開直後のカンガルーケア体験後には【自分の子どもを得たことの実感の深まり】【子どもへの愛しさの高まり】のカテゴリが抽出された。また3事例ではあるが手術前に＜前回の出産に対するひきずり＞があった母親はカンガルーケアを体験することにより＜前回の出産体験のひきずりの埋め合わせ＞が行われ、＜出産に対する満足感＞へつながった。このことから帝王切開直後のカンガルーケアを母親は自分の子どもを得たことを実感できる体験と受けとめていた。また前回の出産体験にひきずりをもつ母親にとっては、喪失からの立て直しに関与する可能性が示唆された。

キーワード

帝王切開, カンガルーケア, 出産, 主観的体験

はじめに

帝王切開による出産では、経産分娩の母親と比較し、出産期待、出産機能、母親役割期待の喪失を有意に体験するとの報告がある¹⁾。特に、母親役割、自己制御の喪失を体験した初回帝王切開の母親は喪失を体験する期間が長いとされる²⁾。そして、このような喪失体験は母親の自己評価を低下させるとともに情緒的エネルギーの蓄えを減少させる結果、児との距離感、育児不安といった感情がわきおこり、適切な母親役割をとることが難しくなるという報告がある³⁾。母親の喪失体験や精神的回復への援助のひとつとして、帝王切開後早期からの母子接触が喪失からの回復を早めると

いう報告があり⁴⁾、帝王切開直後にカンガルーケアを実施する施設もある⁵⁾。しかし、帝王切開を受けた母親が手術直後に体験したカンガルーケアをどのように受けとめたのかを詳細に記述した研究は見当たらない。そのため、母親の喪失体験や否定的感情に対するカンガルーケアの効果についても不明瞭である。そこで本研究では、反復帝王切開を受ける母親を対象に前回の帝王切開ならばに帝王切開直後に体験したカンガルーケアを母親がどのように受けとめたのかを明らかにすることを通じ母親の精神的援助としてのカンガルーケアの効果を検討することを目的とした。

研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 調査期間

200X年8月下旬～11月上旬

3. 研究協力者

本研究では、母親が帝王切開直後に体験したカンガルーケアをどのように受けとめたのかを明らかにすることによって帝王切開により生じる母親の喪失体験や否定的感情に対するカンガルーケアの効果を考察したかったため、前回の帝王切開による出産の受けとめと今回帝王切開直後にカンガルーケアを体験した出産の受けとめを自己対照してもらうこととし、研究協力者を予定反復帝王切開の母親とした。また、緊急帝王切開の母親は除外した。

4. データ収集の方法

データ収集方法は、半構成的面接法および参加観察法である。半構成的面接は自ら作成したインタビューガイドを用いて行い、前回の帝王切開およびカンガルーケアに対する思いや受けとめについて語ってもらった。面接の時期は帝王切開前日、産褥2日目、産褥7日目、1ヶ月健診時と縦断的に4回設定した。帝王切開前日には前回の出産体験の受けとめを把握した。産褥2日目は出産に伴うネガティブな体験は出産3日目以降意識下におさえこまれるという文献^{⑥)}を参考に設定した。また、先行研究^{⑦)}を参考に母親の身体状態が安定する退院間近の産褥7日目、1ヶ月健診を設定した。また、カンガルーケア時の母子の関わりを観察する目的で手術室における参加観察を行った。

5. データ分析方法

面接によって得られた逐語録と参加観察によって得られた母親の言動をデータとした。前回の帝王切開に至った経緯や体験が個々の母親によって異なっているため、まず、母親毎に前回の帝王切開およびカンガルーケアの受けとめに関連した記

述箇所を抽出し、文脈に含まれる意味の内容を読み取りコード化を行い、帝王切開前、カンガルーケア体験後と経時に記述した。その次に意味の内容に共通性が見られるものを集約、抽象化しサブカテゴリとした。更にサブカテゴリを抽象化しカテゴリ化した。また、分析の全過程において母性看護の研究者1名、産科領域に携わるスタッフ2名からのスーパービジョンを受けて信頼性の確保に努めた。

6. 用語の操作的定義

カンガルーケア

現在はNICUにおいて早産児に行われるカンガルーケアと正期産児に行われる出生直後の母子早期接触は区別されているが、本研究では対象施設における当該年のカンガルーケア実施基準にのっとり臍帯切断後、医療者が全身状態に異常がないか確認したのち、児をタオルにくるみ母親と児が向かいあうかたちで直接肌と肌を触れ合わせて抱っこする方法をカンガルーケアとする。

7. 倫理的配慮

研究開始にあたり対象施設の看護部責任者に本研究の主旨と研究協力を依頼し、産科病棟師長、産科部長、手術室看護師長の了解を得た。協力者の紹介を受け、研究者が研究説明書を用いて研究の主旨、拒否する権利、研究参加の有無による不利益は生じないこと、プライバシーの保護に細心の注意を払い、得られたデータは研究の目的以外には使用しないこと、また手術中、手術後の面接の際には対象者の状態に十分配慮し、途中中断も可能なことを口頭および文書にて説明し、研究参加への同意を得た。

結 果

1. 協力者の概要

期間中、協力が得られた母親は5名であった。母親の概要は、表1に示すとおりであった。1経産4名、2経産1名であった。いずれの児も出生直後のアプガースコアに異常はみられず、カンガルーケア施行に至った。カンガルーケアの所要時

間は平均8.6分であった。初回帝王切開の適応は分娩時の異常により緊急帝王切開になった母親が3名、予定帝王切開だった母親が2名であった。いずれの母親も前回の帝王切開時にはカンガルーケアは施行されていなかった。

2. 前回の帝王切開および帝王切開直後に体験したカンガルーケアの受けとめについて

前回の帝王切開および帝王切開直後に体験したカンガルーケアの受けとめは、表2に示すとおりであった。母親達は手術前にはカテゴリ【元気な子どもを得る期待感】をもっていた。その後出産直後にカンガルーケアを体験したことでカテゴリ【自分の子どもを得たことの実感の深まり】を経てカテゴリ【子どもへの愛しさの高まり】へと経過した。

以下に、サブカテゴリを用いて、帝王切開直後に体験したカンガルーケアの受けとめと前回の帝王切開の受けとめについて説明する。尚、カテゴリを【】、サブカテゴリを〈〉、コードを『』、対象者の語りの一例を「」、語りの意味を明確にするための補足を（）で表記する。

1) 帝王切開直後に体験したカンガルーケアの受けとめ

手術前、母親達は帝王切開で出産することを子どもを無事に出産する手段として受容してお

り、「(帝王切開は) 全然嫌じゃなかったと思う。無事に産まれてくれればいいので。」や前回緊急帝王切開した体験から「今回は、2人とも(母子ともに) 無事ならそれでいい。」と語っていた。その一方「あ～、ちゃんと元気にでてくるかなあって思ったら、元気ででてきてくれるかなっていう不安が……」と妊娠中や前回の帝王切開時の体験をとおして、子どもの健康に不安を感じており、帝王切開で出産することに對しては「子どもを無事に出産する期待感」を抱いていた。また入院時、帝王切開直後のカンガルーケアについて医療者より説明を受けると、母親達はカンガルーケアを、子どもを抱っこすることととらえており、「手術室で抱っこできるっていうのは、聞いてなかったので、ちょっとね、うれしく思います。」と『抱っこへの期待』や「前回は子どもちょっと見せられて、元気ですって感じですぐに連れていかれちゃった感じだったから。ほとんど見ずに。」と前回の出産体験から、『子どもを確認したい思い』を抱いており「抱っこに対する期待感」を抱いていた。このことから母親は【元気な子どもを得る期待感】を持っていた。その後帝王切開直後にカンガルーケアを体験し、前回予定帝王切開だった母親は、「とっさに指と足を数えてしまったかもしれない。五体満足かなあって。」と『視覚により五体満足と実感』していた。ま

表1. 協力者の概要

母親の年齢	20代	30代	30代	30代	30代
出産経験(回)	1	1	1	1	2
分娩に至った週数	38	38	38	37	39
前回帝王切開の適応	胎児仮死	児頭骨盤不均衡	胎児水腎症	胎児仮死	児頭骨盤不均衡(第1子) 既往帝王切開(第2子)
前回帝王切開時の母子分離の有無*	無	無	有	有	無
子どもの出生体重(g)	3000台	3200台	3500台	2900台	2800台
Aps**	8/9	9/10	9/10	9/10	9/10
カンガルーケア 所要時間(分)	10	12	13	3	5

* 母子分離とはここでは産後1か月以上、母親と子どもが離されたことを母子分離という。

** Apsとはアプガールスコアの略である。子どもの出生直後の状態を評価するために使用され総計10点。8点以上が正常。出生後1分/出生後5分の得点を示す。

た参加観察場面において、母親は出生直後「元気に泣いてる。」と発言したり、『子どもの重みを実感』したり『子どもの温かさを実感』することで視覚だけでなく触覚や聴覚など五感をフルに活用しく抱っこにより五感で子どもを体感>していた。また、「パパに似てる。」「耳ってこんな？お姉ちゃんに似てるかな。」と『子どもを近親者と比較』したり、「いやあ～上の子に似るとと思ってたけど……。けっこう違つてびっくり。」と想像していた子どもとの違いを見い出すなど視覚により細部にわたるまで観察を行うことにより<自分がこの子を産んだ

という確認>をしていた。そして母親は「この人がここに来て（胸の上）、ここに来るからやっとかわいく見えるのかもしれない。見ただけより、頭とか触ってみるほうが。」「なんか、安心感はありますね。すぐに抱っこできたし。」と語り、子どもを抱っこできた喜びから出産直後より<子どもへの愛しさの沸き起こり>を感じていた。これらから母親は【自分の子どもを得たことの実感の深まり】を体験していた。カンガルーケア体験後<子どもへの愛しさの沸き起こり>を出発とし、「前の子の時はかわいいと思うまでに時間？かかる、それが短い気がす

表2. 前回の帝王切開の受けとめと帝王切開直後のカンガルーケアの受けとめ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
元気な子どもを得る期待感	子どもを無事に出産する期待感	子どもを無事に出産したい思い
		子どもの健康に対する不安
	抱っこに対する期待感	子どもを確認したい思い
		抱っこへの期待
		抱っこに対する戸惑い
	前回の出産に対するひきずり	前児を抱っこできなかった心残り
		正期産への強いこだわり
		母子分離の切なさ
		母乳保育へのあこがれ
		子どもとの関係性の危惧
		母親としての不全感
		視覚により五体満足と実感
自分の子どもを得たことの実感の深まり	抱っこにより五感で子どもを体感	子どもの重みを実感
		子どもの温かさを実感
		触覚感じる子ども
		子どもを近親者と比較
	自分がこの子を産んだという確認	空想の子どもと現実の子どもとの統合
		愛しさの実感
		愛しさの沸き起こり
	前回の出産体験のひきずりの埋め合わせ	抱っここの喜び
		母子二人の世界に没頭
		子どもの大きさを実感
子どもへの愛しさの高まり	愛しさの高まり	前児と違う個であることの確認
		愛しさの増加
		子どもとの相互作用を期待
	よみがえる抱っこの感覚	今後の育児への期待
		抱っここの感触の沸き起こり
		抱っここの喜びの思い起こし
	出産に対する満足感	抱っこできた自分に対する喜び
		正期産で出産した喜び
		母乳保育への期待

る。」「赤ちゃんがじっとみてくれてるの見たら愛しくなる。」と『愛しさの増加』や子どもとの相互作用の中で＜愛しさの高まり＞がみられた。また母親の中には「抱っこした感覚は忘れないっていうか残ってる。今でもこうやって抱っこして、頭ここにあると、あ～少し大きくなつたなあって思ったり。そんなに大きくなつてないんだけど、こうやって抱っこして重みとか温かみとか。」と『抱っここの感触の沸き起こり』を感じたり『抱っここの喜びの思い起こし』をすることでカンガルーケアを振り返り、＜よみがえる抱っここの感覚＞を体験していた。なお、今回のカンガルーケアに対する否定的な感情は語られなかった。

2) 前回の帝王切開の受けとめ

5名中、3名の母親は、前回の出産に対して『前児を抱っこできなかつた心残り』、『正期産への強いこだわり』、『母子分離の切なさ』、『母乳保育へのあこがれ』、『子どもとの関係性の危惧』、『母親としての不全感』を1つないしは複数語っており、母親個々が＜前回の出産に対するひきずり＞を残存させていた。

前回の出産に対し、出生直後から母子分離を経験した母親は「私はすぐに抱っこできなかつたのが、すごくやっぱりなんかあの後（前回の帝王切開の後）今も響いてる（自分と第1子の関係に）。関係ないのかもしれないけど、1人目は実家に預けて私達親がいなくても平気なんです。泣くってこともなくて、どうなんだろう？なんかあまり目を合わせて話さなかつたりしたら、小さい時のそういうの（出生直後の母子分離）があつたからかなあって思つてしまつて。」と抱っこできなかつたことに起因して『子どもとの関係性の危惧』を感じていた。また別の母親は「突然生まれてくるから、前の子の時はかわいいと思うまでに2～3日かかったような気がする。どうなんだろう……」と母親として子どもに対する愛着に不安を抱いていた。

帝王切開直後にカンガルーケアを体験した際には母親達は、＜前回の出産に対するひきずり＞の部分に焦点をあてるかたちでカンガルー

ケアを体験しようとしていた。前回早産で出産した母親は「痛いながらも重みはある。思ったより大きいなあとは思ったんですよ。」とカンガルーケアを体験することで子どもの重みと『子どもの大きさを実感』し「なんかある意味やっと産んだって感じ。前の時はすぐに連れて行かれたから。産んだ実感もなくて何がなんだかさっぱりだったけど今回は産んだ実感もあるよね。」と語っていた。

また、前回出産直後から母子分離状態になった母親はカンガルーケア中、血圧が低下し顔色不良状態になっていたにも関わらず、子どもの背中に手を置き、子どもを見つめていた。母親はその時のこと振り返り、「もっと抱っこしていたかったけどお腹のことも気になるから。でも抱っこしている間はお腹よりこっち（こども）に集中できた。」と『母子二人の世界に没頭』する様子がみられた。このように前回の出産体験にひきずりをもつ母親達はそれぞれ個々に＜前回の出産体験のひきずりの埋め合わせ＞を行っていた。

そしてカンガルーケア後には、前回の出産において『母親としての不全感』を語った母親は帝王切開直後にカンガルーケアを体験できたことで「出産の方法とかそういうのってあとからずっと引いちゃって、育児の時とかしおっちゅう思い出すんね。（中略）今回はプラスに考えていけるかな。」「まあ1人目のはね、抱っこもできんと顔だけ見てぱあ～っと行っちゃつたら今は本当にじっくり抱っこできたから達成感ではないけど、あ～頑張ったなあとかって思えたし。前に比べたら満足。」と語った。また前回出産直後から母子分離状態になった母親は「すごくうれしかつた。触れるっていうのがすごい。テレビドラマで産まれたらすぐ抱っことかよくやってるから、あ～いいなあとか思つたから。自分もそれができたのがすごくうれしかつた。」と『抱っこできた自分に対する喜び』を語った。つまり母親達は帝王切開直後にカンガルーケアを体験したことにより＜前回の出産体験のひきずりの埋め合わせ＞が行われ＜出産に対する満足感＞がもたらされていた。

考 察

出産とは女性にとって大きなライフイベントのひとつであり、母親自身が出産体験をどのように受けとめるかということはその後の母親の自己概念ならびに母子関係の形成に大きな影響を及ぼすといえる。今回帝王切開を受けた母親は前回の帝王切開ならびに帝王切開直後に受けたカンガルーケアについて【自分の子どもを得たことの実感の深まり】【子どもへの愛しさの高まり】を体験をしていた。そこで母親の精神的援助として帝王切開を受ける産婦へのカンガルーケアの効果について、自分の子どもを得たことの実感の深まりと子どもへの愛しさの高まりについて考察し、その後母親達の中には前回の出産体験にひきずりをもつ者もいたことから、カンガルーケアが残存する過去の出産体験に対しどのように折り合いをつけていく機会になるかについて考察する。

1. 自分の子どもを得たことの実感の深まりと子どもへの愛しさの高まり

今回協力者となった母親は手術前に帝王切開に対する元気な子どもを得る期待感をもっており、子どもを無事に出産したいという思いから帝王切開で出産することもやむを得ないと感じていた。そして帝王切開後にすぐに子どもを抱っこすることで、視覚により子ども全体をとらえ次に手足の数を数えるといったような、より細部に至るまで子どもを観察していた。Rubin⁸⁾は子どもの誕生直後、母親は子どもの認識に先立って確認の作業を行うしており、視覚的接触は子どもの確認と位置づけにおいて、重要性をもつと述べている。母親は前回帝王切開後すぐに子どもと分離された場合と異なり、カンガルーケアを体験したことでの視覚的接触による確認作業を行うことができたといえる。また、子どもを確認する作業は、目でみたことをより確かなものとするための手段として触覚によるアプローチとなり、より多くの情報を引き出すという⁹⁾。母親達も視覚的接触に次いで子どもに触れたことによって「あったかい。」と体温を感じたり、子どもの重量を体感しており、子どもに触れることによって五感で生きている存

在として受けとめていた。そのことより、母親は産まれた子どもが自分の子どもであると認識することができ、それが実感へと繋がっていた。つまり、出産直後にカンガルーケアを体験することは視覚的接触と相まって、母親にとって自分が産んだ子どもを確認する作業を容易にしていたと考えられる。さらに、母親の中には子どもを「兄弟に似ている。」や「パパに似ている。」など特徴をとらえて確認し、近親者に投影させることで子どもを認識しようとする姿もみられた。子どもの特徴に注目することは、単純に身体部分を確認するよりもその女性の家族など愛するいろいろな人の特性を集めることで子どもを養育し、慈しみたいという欲求が湧いてくるとされている¹⁰⁾。母親はこの投影という確認作業ができたことにより子どもと自分との間に親密な関係を成立させようとする第一歩を踏み出せたと考える。これらのことより、カンガルーケアを体験した母親は子どもを確認する作業を十分に行えたことにより結果として産まれた子どもを自分の子どもとして認識することができ、自分の子どもを得たことの実感の深まりへと結びついたと考える。さらに自分の子どもを得たという実感が深まることによって、カンガルーケア体験後は子どもに対し「ここに来るからかわいいと思えるのかもしれない。」「なんか安心感ありますね。」と子どもへの愛しさの沸き起りを語っていた。さらにその後において「前の子の時よりかわいいと思うまでの時間が短い気がする。」と語っており、子どもへの愛しさがより高まりをみせていた。

今回協力者となった母親は経産婦であった。母性意識は新生児や子どもとの相互作用を通じて更なる高まりを見せるとも言われており、いずれの母親も長子との相互作用の体験があることから今回の子どもに対しても愛しさの感情が出産後早期から沸き起ったことは否めない。しかし、出産直後にカンガルーケアを体験し児を認識できたことにより従来の帝王切開後すぐに児が連れ去られる感覚の後、またあらためて児と関わるといった断片的な関係性のスタートではなく、出生直後より継続的に児と関わることができたという認識を母親がもてたことも愛しさが高まった要因のひと

つとして考えられた。

一方、母親自身の心理的喪失の観点からみると母親の中には前回の帝王切開による出産に対し「産んだ実感がない。」や母親としての不全感を語る母親もあり、先行研究^{11,12)}においても報告されている出産期待や母親役割期待の喪失の内容と一致していた。加えて児を連れ去られる感覚は後に自分の子どもを産んだ実感を得られないことや母親役割の喪失につながる可能性があると考える。母親にとって自分の子どもであるという実感があやふやなまま母親として育児を担っていくことは、子どもとの関係の中で挫折感や失敗感を味わった時に母親役割の喪失感情を抱いても不思議ではない。帝王切開直後の母児面会における母親のニーズを調査した研究¹³⁾においても、児へのタッチングや五体満足の有無を確認する希望は高く、やはり視覚、触覚により子どもを確認し、出生直後に自分の子どもを得たことを実感することは母親役割を遂行していくことにおいても重要であると考える。このことから帝王切開直後にカンガルーケアを体験することは、出産期待や母親役割の喪失を軽減する可能性があると考える。

2. 残存する過去の出産体験との折り合い

前回の出産体験の思いの中に過去へのひきずりがあった母親は、今回の帝王切開での出産を前に前回の出産に対して個々に出生直後抱っこできなかっことに対する心残り、正期産への強いこだわり、母親としての不全感をもっていた。これらのひきずりは言うなれば前回の帝王切開時、東野ら¹⁴⁾の喪失の枠組みによる出産期待の喪失や母親役割期待の喪失があったものと推測される。しかし、母親はこれらのひきずりを今回帝王切開直後に子どもを抱っこすること、つまりカンガルーケアを通じて可能であれば克服したいとの思いが強く、今回の出産に対して期待感を持っていたといえる。結果的にはカンガルーケアを体験した母親の中で子どもを抱っこすることに対し期待を抱いていた母親は抱っこに没頭し、かたや正期産の子どもを望んでいた母親はカンガルーケアにより、子どもの重みと大きさをそれぞれに実感していた。一方母親としての不全感を感じていた母親は、カ

ンガルーケアを体験できたことにより子どもへの愛しさを強く実感していた。母親は帝王切開直後のカンガルーケアの体験を振り返り、子どもを抱っこできた自分に対する満足感や正期産で出産できたことに対する達成感、さらにその後の育児に対する期待感など今回の帝王切開に対し満足感を得ていた。このことは、つまり帝王切開前に抱いていた出産に対する個別性をもった期待を帝王切開直後のカンガルーケアをとおして実現することができたこと、そのこと自体から母親に満足感がうまれ個々における達成感や自信が母親にもたらされたものと考える。Simkin¹⁵⁾らは出産に満足を得ている女性は、達成感をより個人的な達成感の表現として語る傾向があったと述べており、今回も同様の傾向がみられた。また、Rubin¹⁶⁾は満ち足りた完了感は新しい課題や新しい問題に対処する能力と動機づけを与えるとも述べているため、今回の帝王切開による出産に対する満足感はその後の育児への期待感や母子関係成立への動機づけになっていくものであると考えられた。

帝王切開に伴う様々な喪失を体験することは母親の自尊心、自己評価を低めることにつながることは既に報告されている¹⁷⁾。母親の自尊心の低下は母親役割の遂行に影響を与え、その後の育児の質にも影響がでると考える。今回の母親においても「この子私がいなくても平気なんです。」と母親としての自分に対する不安をずっとひきずっていた。このことは前回の出産に対する喪失が母親としての自己概念に影響を与えていたと考える。しかし、今回帝王切開直後にカンガルーケアを体験し、子どもの存在を実感したことや出産前に抱いていた出産に対する期待を実現したことにより、出産に対するひきずりが埋められた。そして、母親は繰り返し手術直後のカンガルーケアの感覚やその時の感情を思い起こし、母親自身の満足感を高めていたと考える。中島¹⁸⁾はカンガルーケアを実施することにより早産児の母親は子どもとの関係と母親としての自己を築きながら体験を意味づけしていく中で癒されていくと報告している。帝王切開直後のカンガルーケアにおいても、前回体験したひきずりを母親自らが折り合いをつけようとする自己概念の再構築のきっかけになったと

考える。

以上のことから、反復帝王切開を受けた母親はカンガルーケアを自分の子どもを得たことを実感できる体験と受けとめていた。また、前回の出産にひきずりがある母親にとっては今回のカンガルーケアの体験によって前回体験したひきずりを埋め合わせることにより、母親自身に出産に対する満足感がもたらされたと考えられた。

結　　語

帝王切開直後にカンガルーケアを体験することにより母親は、手術前よりカンガルーケア体験後にかけて【元気な子どもを得る期待感】【自分の子どもを得たことの実感の深まり】【子どもへの愛しさの高まり】を体験していた。また、<前回の出産に対するひきずり>は帝王切開直後にカンガルーケアを体験することで<前回の出産体験のひきずりの埋め合わせ>が行われ、<出産に対する満足感>へつながっていった。このことから帝王切開直後のカンガルーケアは母親にとって自分の子どもを得たことを実感する体験と受けとめていた。また、前回の出産にひきずりがある母親にとっては喪失からの立て直しに関与しうる可能性があることが示唆された。

本研究の限界と課題

今回は対象者数、施設ともに限られており一般化には無理がある。しかし母親の喪失や否定的感情に対する援助を考えるうえで帝王切開直後のカンガルーケアの効果を検討する基礎資料となるものと考える。今後初回予定帝王切開を受ける母親にも対象を広げ、帝王切開直後のカンガルーケアが母親の喪失の軽減や精神的回復への一助となりうるのかという観点から研究を深めたい。

謝　　辞

本研究を行うにあたり快く研究に協力してくださったお母様とご家族、研究実施にあたり快く研究の場を提供し協力してくださった病院の産科病

棟師長、産婦人科医、病棟ならびに手術室スタッフの皆様に深謝いたします。

引用文献

- 1) 東野妙子、近藤潤子：初回帝王切開分娩の婦人喪失と悲嘆過程の分析－経産分娩の婦人との比較－、日本看護科学会誌 8: 17-32, 1998.
- 2) 宮田隆子：初回帝王切開分娩が母親に及ぼす影響と対処行動－母親役割取得の視点から－、第26回日本看護学会論文集母性看護学30-33, 1995.
- 3) Msrut JS, Mercer RT: The cesarean birth experience, implications for nursing, Birth Defects 17:129-152, 1981.
- 4) Erb L, Hill G, Houston D: A survey of parents' attitudes toward their cesarean, birth in Manitoba hospitals, Birth 10:85-92, 1983.
- 5) 日下富美代、針谷真実子、佐藤陽子ほか：現場から、母と子の絆を育むカンガルーケア、家族看護 6:95-99, 2008.
- 6) Affonso RN: "Missing Pieces" – A study of postpartum feeling, Birth and family J, 4 Winter:159-164, 1977.
- 7) 千葉ヒロ子：帝王切開分娩と母性意識（II）、母性衛生, 26:547-548, 1985.
- 8) Rubin R: ルヴァ・ルービン母性論. 母性の主観的体験、新藤幸恵、後藤桂子訳, pp156-158, 医学書院, 1997, 東京.
- 9) 前掲書 8), pp156-158.
- 10) 前掲書 8) pp156-158.
- 11) 近藤潤子：帝王切開分娩における母子相互作用に関する研究（第2報）－帝王切開産婦の心理的喪失体験の分析－、周産期医学 17:141-147, 1987.
- 12) 前掲書 1)
- 13) 佐々木希世、西嶋俊博、富沢有加ほか：帝王切開を受けた患者の母児対面の現状とニーズ、日本手術看護学会誌 6:23-25, 2010.
- 14) 前掲書 1)
- 15) Simkin P: Just another day in a woman's

- long-term perceptions of their first birth
experience part1.Birth 18:203-210, 1991.
16) 前掲書 8), pp135-136.
17) Cox BE, Smith EC:The mother's self-
esteem after a cesarean section AmJ

- MCN7:309-314, 1982.
18) 中島登美子：カンガルーケアを実施した母親
の早期産体験の癒し. 看護研究33:331-342,
2000.

Women's subjective experiences with kangaroo care immediately after a repeated cesarean section

Kayoko SAITO¹⁾, Tomomi HASEGAWA¹⁾, Kuniko NAGAYAMA²⁾

1) Department of Maternity Nursing, Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Sciences, University of Toyama

2) Chief, office for Gender Equality, University of Toyama

Abstract

Kangaroo care after childbirth is a technique that is widely practiced in many advanced nations. In this research, we aim to clarify the subjective experiences of women practicing kangaroo care after cesarean sections. The subjects in this study comprise five women who underwent repeated cesarean sections. The analysis was conducted using qualitative induction. We found that prior to a cesarean section, the mother hopes to obtain a fine child. It is only after the operation that the mother starts to feel increased love and affection for the child. Three of the five women had previously given birth to children with psychological damage; for these women, the need to participate in kangaroo care could be seen as a kind of compensation for the previous births. Further, these three women all underwent satisfactory deliveries. As mentioned above, it was thought as experience which can realize that the mother got her child for the kangaroo care just behind a cesarean section. Moreover, this study revealed that mothers who experienced psychological damage in previous childbirths participated in kangaroo care as form of recovery therapy brought on by the sense of loss they experienced previously.

Key words

cesarean section, kangaroo care, childbirth, subjective experiences